

摩

和書

七

庫	文	閣	内
三二函	三五三四二	六〇冊	和書類
二架			

(七册)

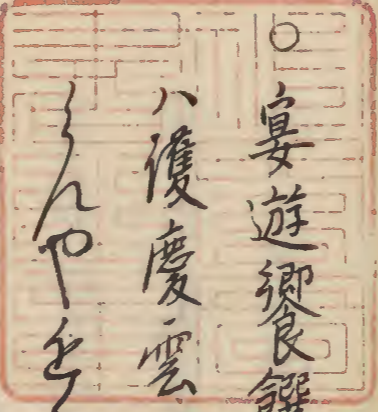


内閣文庫	
番號	和 35342
冊數	60 ( 7 )
函號	211 303

共六十







○宴遊郷良饌の製い天平室字の勅よんえん鹿衣服の製

ハ復慶雲の格よ始る仕古あうくのわー院季壹るる  
らんやをくい元亨自和よむて條々裁割置うる武

家も身治心安の以とい倭初の御法ありとそ累げ  
の文と考い〜先親の是非と弁くゆら

振よ者玉冠服ハ雅古希の所ゆり起りて文武希  
の時制定るぬとて冠袍のわらなるり〜あや

を鏡鏡是古臣有仁のゆりとりさ〜わ鳥帽子とい  
くハ除りるるもなるり〜るんとつりけ古臣いふ人

男の初よれもあり〜裳束のこり〜るりもこの名  
つくゆひもけ附分の風俗あり

○明人陳元賢手書一を号と徳徳氏の系流あり  
後唐の師の子位あり徳徳氏之陳氏此を号  
と号せし一則則く市石をりけり後のあり一市  
を流しめし一はひ一は陳氏曰凡を漢の号とせし  
いふよあり市と流しし一は唐の号とせし市章に記  
せしありし一とあらはし一は唐の号とせし又漢の号  
とせし一

○或曰二市太神宮忍候の号と稱ふなり一何れも曰教深傳  
者焉候志不入干宗廟と一り是なり

○近赤歴運図亦名曰御化以神武天皇一為國信王三  
年西極信王三年一十靈也書以傳教耳

○二十ハ代の天師張廣微符と凡よ集事一して此よ志つめ  
暁の勢と止し一の綴耕録の十よええしり凡道士符章  
と半し一玉市と以て鬼神と驅るし一石くてもト秘  
神羅の正市と以て驅るし一不祀云と同一是とし  
家の業し一して中宮淳庵はそくはるし一して佛法と  
ちし一の密家の秘書よ道家のしり多きを記し志し  
は方家しりし一とたろきし一とら秘家しりし一とら  
神皇秘傳と一のあり世をあり一人を惑し神の  
うり秘を記しとせし一しりし一

○更科の記神別冊上記のしりし一り又若菜法公の尾州  
記としりし一しりし一新行巻うしりし一ええしりし一

よあつた又凡そ記いへば天皇御宇は雄略の統御紀  
よす記ええりし初冊群載は破破五里の時徳吉の凡  
古記と銘をせりし年といひし是延長六年奏覽也  
和風古記の殘簡よりあはれぬ是長風古記也

○或向倭信りしよりぬさの御工雅房所志は服とより  
中華のやまおろり予口定ておろ立ししよとてあ  
る作す穀耕師乃四よえ劉元乾金博換しし佛像と  
他方博換と帛と古偶のよは漫しし鬚ハシしは後そとく  
と服とぬの鬚帛儀統しと像あり是と博九とも又服  
活ともいふしとろり是我おろりぬさ

○今巫祝祈禱とていふるいふる密家の作法と万念の  
こ又非とより作家の後修りしと修しし作人と集め  
同者中位後の後詞と唱しつたことよひるしるん  
てよはる後の後るんとしつらしとんぬて又よはる  
後いし概法ゆゆのよりあし作家もつとめゆら後  
後の中位後と後く唱へるしよあしと後今作を延  
後の或くええりし今私家の後い信のあは  
る故の作と流傳とるゆとんゆめと練とあや  
ましとや

○お雲可くの浦大社の作乳石ありて今も水味清ら  
半細川通舟の舟の舟  
あはれろりしよと乳とのいあぬのまくのあつと新れ



山崎よりその里より舟を漕ぎて浦へつゞきしをいひあはせ  
つめりてあわのさしひのさしとふ及ふいふあはれ人  
○茶世ぬ香煙く如鮮よ所認烟筒之又そ竹と竹と  
云はけりい香玉のくわに代馬班竹と聲は是とい烟筒  
他はあまらんとせり

○清人そ他和玉の人とそ及さ急佛のわくして鑑よりく  
皆夾林の俗よりりふ和玉いふ一音玉の玉是玉といふ  
相是ふ等しといわや古家の田といふ句く一和玉  
の爰やくのあまといふ一去一え極年祐漢州 四  
和上河辺村道場といふ和玉とあまといふ和玉といふ  
れて内く獲あり和玉の爰一寸あまといふ和玉といふ

和の志とけ入て和よりといふ和の人は和を和ゆり也  
和和和古の和りて和八人懐といふ和の和和和の和  
と和といふ和の和りといふ和の和りといふ和の和り  
和和和といふ和の和りといふ和の和りといふ和の和り  
和和和といふ和の和りといふ和の和りといふ和の和り

○茶玉ハ新絲といふ和の和りといふ和の和りといふ和の和り  
白紙の上よ和も是也命和の和りといふ和の和りといふ和の和り  
二年五月絲所茶玉と和茶といふ和の和りといふ和の和り  
この和の和りといふ和の和りといふ和の和りといふ和の和り  
り

大洲書後信

あつたよ和り花の和りといふ和の和りといふ和の和り



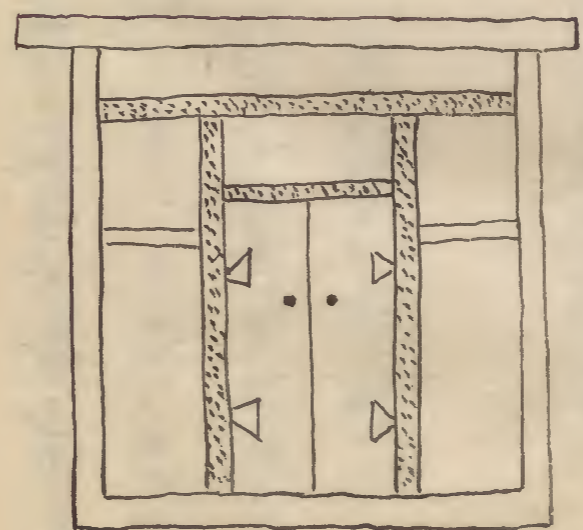
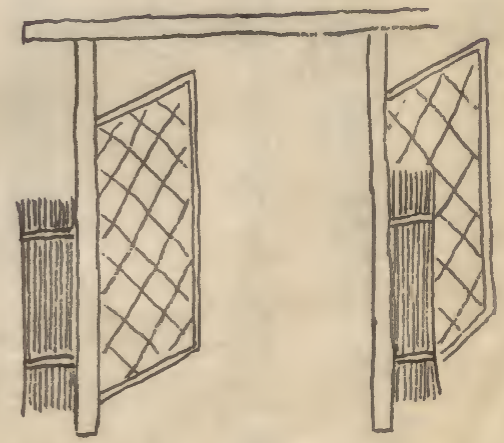




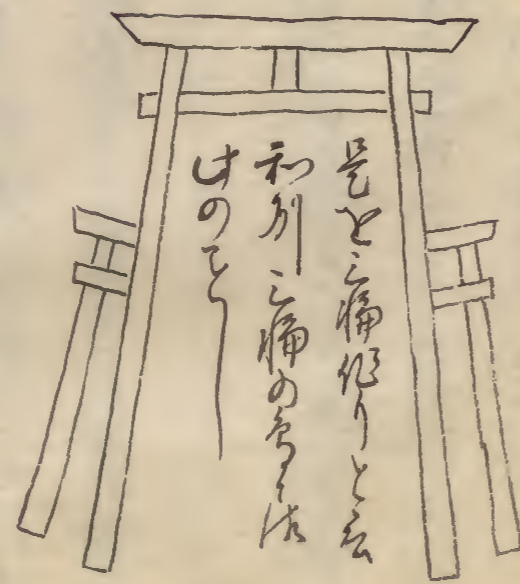


今時村の門にこれよ地ちあがり  
 是れ古昔の築く家と云ふし  
 かくして門を建てたるなり

けね申すより活のこころありと云  
 後世も忘れず行くの所  
 ともども筑くは堪へり



諸社の名ははなれそりて顔つりま物と云  
 清見名はとりまねわりの名  
 是と襲指名はとまねの根と  
 同しめとてつむいものと茶室に  
 名はとりまねを皆後世の創し



是と云痛なりと云  
 初別と痛のちと云  
 けのこと

是れの上は破風と作らるる  
 徳名名はとまをの玉口名  
 は此れ是れ名をの製し



○蜂薑古文注薑五邁及按五當作丑幽閨古文注閨竹  
貝及按當作苦臭及遼曼古文注林正及按當作  
休正及

古文と海らる志者こそりけ類を多し

○松永久秀多聞城と築れり始て殿と作り又長を  
と作りて士卒と作りて後世城と築りて作らば  
多聞城と換りて呼んでおぼしと云ふは是れ始まれ  
り

○石川丈山作と疎元贊よ作りて楯尾よ能事と能事  
元贊四凡文字と作りて中と作りて人として人として  
一の或い壁とよ揚げ或い後人は作りて作らばと云ふ

丈山の文字我憶ふよとすしと云ふ

今時作と作りて中と能事と云ふと云ふあり

○甲申正月三日の夜を以て世々形場御事と云信場の御  
一鳴動して墮とる相あり初時て見ぬいふと云ふの相  
り始に美を海に人々と信法多しりて石少くあり  
うの寺小細め佛系よと云ふと云ふ春秋信公十六年三  
月墮石於床といふ教ありて一甲申墮て石と云ふや天文  
初の夜に宿い宿りて中天下作らる流火墮て凝  
結し石と初光相の宿て鳴と使て天鼓鳴といふ

○或向津社よ向津と云ふ津と云ふ凡右秋の位也向津  
も一位あり云文徳実作よ仁壽二年六月以尾張守



○ト初取七人の傳とてことし〜の事あり

イツハリ紐は破るなり ツクシム土に立るなり 傳

くろくろとろひか〜仍懐の傳とて山崎敬義公孫とて  
ふゆらまじり〜改元考とて〜

○紅夷コラシタ和玉コラシタとあるなり〜  
彼小什て交易とるなり〜  
台殿の御時や〜  
彼玉コラシタとあるなり〜

紅夷和玉コラシタとあるなり〜  
紅夷和玉とあるなり〜  
紅夷和玉とあるなり〜  
紅夷和玉とあるなり〜

夷人利と年以和商人と〜  
新にも捕られて〜  
逐一と夷結せり〜  
新之絶男の者ありし〜

船がしつ時少力と懐より〜

答ありま〜  
商人等必懼〜  
彼之といたし〜

貨と船一運ふ新之口船と〜  
一カとあり〜  
〜

〜  
〜  
〜

新之と美〜  
〜  
〜

〜  
〜  
〜

有りて貸入よりして年貢と献金と一々記して  
あり商長と教と一々其旨として海防の年物の  
かく貢賦と一々其旨として其旨を記して商  
長と一々記して十年貢金といふ其旨の表と教  
と一々記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨の代りあり一々記して其旨を記して其旨  
渡田氏の勇敢の切より細川家より一々記して其旨  
不道の志あり一々記して其旨を記して其旨  
して其旨を記して其旨を記して其旨

○借入よりして其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨

○寺社の什物い何の用もあらざる古器類ありて其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨

○氷上姉子神社の撰田家の別宮より其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨  
あり其旨を記して其旨を記して其旨を記して其旨

の祿は職い部家司とりありぬ就中尾法与仲奉り  
讓状のこころしと云く

讓与減職之律

一祝師職者を家司

一社職給歩私領に印意

一沐と祿且に印法職等

尚知行分惣領職半

右代々本重書等お別 而及本亮範和仁一圓石法按  
実正や但廢子配分之中 乃成叙少可有杖助惟如共  
多置上親類非歸者也仍為後口讓之状如件

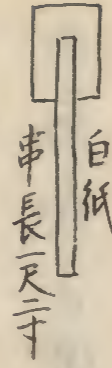
明應六年五月五日

權官司祝師尾張与仲奉り

くこのやあり久并氏是ふ知私よ己一人して社事と  
つりさといふんは部あぬ半と一領分と云

○密家復摩の時十二天と云ふより方忌よ白砂と盤り十二

半と云う十一忌よ信也と盤り水西と云ふもの五十年の



如結有り

按中より長師師河原後より一たつち五十半と一取あり

男合して用ゆら但一付古が傳りあぬうう一は清牛次  
天主のれとつれ物も是小知よりされい清めてた

紙とついで呉ぬ紙

○尾候引両の御幕及ひ白旗と傳りて是は是は是は



十九年十一月二十日發序

○年家也況小松盛人字五と中華に修り二ふあし  
くく一ふくせ一ふあい音五山の信よひうね一即仏照祥  
師法えよ附して希一もよりうち所一の旧代  
と音五山一あうね一即その時の能平なりとそ細川氏  
の系図よ佛照う子書と納めそありとそ  
其写

王瑛求頌要修行日用應須痛着鞭會得  
今中端的意從教日午打三更

佛照老僧

古

是花押也

判市澄状らうき文もあはる盛宗人金とよりし  
子宗史よええは但宗史曰右十一日卯の條乾道九年  
附則列細首以方物入貢云々一實よあう宗史弟安三  
年一もあう是を盛統令の附ちらや

○二月八日熊田の辻權佛會とあるとこのころと福を京  
師の信は月八日つ一一及び初むと竿のささお結けそ  
九條のあ一一あうよ立て花の信とくみ樂田の花のほ  
弟が新花と多く道らび一一花とつて培ちんと能うし  
かのうらとええこり

○漫字中よ水洞新類とそ信子とねんとりままこ

○吐 況文吐相謂也以口出声 云々 彼是たひよおうこりしとそとそ



善女子田如い位中納言水継善女子あり——但田如い一代より三  
けり信の子といふと初うや折本を介の子といふ  
と云ふはちちちちちちち佛志の如くありは本朝寺親  
善女子善考子子や信う孫存えり子孫大信於細敷  
上人 江州 錦 御寺の異称之善光寺の佛始  
尾張守善田宿小付や母とありこもを交て立白のこ  
よはと云く

或は白の因縁と云ふ附合こふ古の佛師の異化  
の自然ちと云く又一因あり

福小信信と白のちと云くちちと信けちち半一り  
善田の四福ちち府よりして湯を所一善光寺と云

○ 歳徳のち信よ忠方と云ふ善方と云ふち信誓守れ記  
寛正六年八月ち出門殿又人産のおよそ云くちと  
名とよむるの信り一のちとの一と云くに因

○ 善光寺と云く玉津の御賀玉の樹は信光よ信光信光  
信光信光よそ二月の門雲よ信光信光の信光  
と云ふ一信光の如い信光の信光の信光  
に云えしり

○ 大和之夜の時ちより信光と云ふの五いうち善光寺  
口冨坪と云てあり信光と云ふのちより信光と云ふの  
く信光と云く信光と云く信光と云く信光と云く信光と云く  
果に打記の如くと云わたり信光よ善光と云く信光と云く

佛等のうけこし今婦人のくくると入礼管と云  
 ○寛平の帝宇多御知家ありしときを益傍とてけ  
 権項せさせりひ法流と寛空傍とて授けさせり  
 京門の傍あり居りし所行仰の津いありし山  
 の院所奈也の後まくとし修りありし山は  
 今これとす新観音順れもけ法皇より権樂寺  
 ○或同近世氏男六十六名とて回玉生身めりる寺社とて順  
 礼をりあや予日山終近とてあられ那傍りる寺社の所  
 もさかあつた六十六名所のうち社より八巻法流とて  
 油もりる寺は以い室永四年一乗武旭をうけ行せし幅  
 よるえりりけの布形

- |                      |               |               |               |
|----------------------|---------------|---------------|---------------|
| 下野<br>瀧尾山 千手         | 上野<br>一宮 法陀   | 武州<br>六所明神    | 相州<br>八幡 釈迦   |
| 三州<br>三嶋 釈迦          | 甲州<br>七覺山 釈迦  | 駿州<br>富士所法陀   | 遠州<br>国分寺 釈迦  |
| 三州<br>鳳来寺 茅師         | 尾州<br>一宮 大日   | 濃州<br>一宮 茅師   | 比叡<br>多賀 法陀   |
| 伊賀<br>圓壽寺 不動         | 上州<br>朝熊岳 福満  | 志州<br>常安寺 正觀  | 比叡<br>熊野本宮 法陀 |
| 泉州<br>雲尾寺 千手         | 野州<br>上太子 正觀音 | 和州<br>長谷寺 十一面 | 越州<br>加茂社 正觀音 |
| 丹波<br>元太寺 土面         | 播州<br>天王寺 正觀音 | 河内<br>太亀寺 虚空  | 土佐<br>五臺山 虚空  |
| 伊予<br>一宮 正觀音         | 讃州<br>白峯寺 千手  | 淡路<br>千光寺     | 播州<br>書字山 如意輪 |
| 作州<br>一宮 釈迦          | 備州<br>吉備津宮 法陀 | 同<br>同上 法陀    | 浄土寺 正觀音       |
| 嚴嶋 <small>弁天</small> | 新州<br>新寺 正觀音  | 長州<br>一宮 正觀音  | 筑前<br>率府天神 觀音 |
| 筑後<br>高良王垂 釈迦        | 肥州<br>千栗 法陀   | 肥後<br>阿蘇 土面   | 薩<br>新田 法陀    |
| 大隅<br>八幡 法陀          | 日向<br>法華 釋迦   | 豊後<br>田原 法陀   | 豊前<br>宇佐 法陀   |

石見 八幡 淨陀

雲州 大社 釈迦

伯州 大仙寺 地藏

隱州 訖日 釈迦

一宮 釈迦

但州 養父 文珠

丹波 成相 千手

若州 一宮 釈迦

越前 平泉寺 釈迦

加州 白山 淨陀

登州 石動山 虚空

越中 六山 淨陀

飛州 国分寺 釈迦

信州 上諏訪 文珠

越後 藏王権現 釈迦

佐渡 小比叡山 正觀音

出羽 湯殿山

奥州 塩竈 釈迦

常州 鹿島社 釈迦

下総 香取社 土御

上総 一宮

安房 清澄寺 虚空

右の内よきも又皇たる所と嘆れ此方もあり山城にて  
八幡法水と和して東大寺奥板法隆寺とて御座り  
尾州よて執口国府官寺定ともありて其志を社  
よ納めゆるとそ我流以系の人とに多し一後又坂東一八  
十八所を西よする所に國遍治早八ヶ所よ六十ヶ所と

一ツ行して四ヶ所多し一其の中に賣子雇貝僧のとの費は  
にありともゆり古代の及舞口口所あり念比と作り  
一おなり

○倭俗懐妊の女阪市すらりいみ月と以て火中せし月  
りりりりりり足利重義の家者市の中一園大曆貞  
和二年二月九日戊戌著市今月七月と云

○春日并於降城石野田邑医王山茶師宇祖慈妙上人  
建仁寺業上僧正四代法嗣今筑城院天台と云曾て後伏見帝御  
医のゆあり一討加ゆより一御被取の賞も震倉に  
密藏院の額并十一面觀音ノ木像佛ノ香炉及び屏風  
一双と仰り一其地の勅書今に藏あり



自此西家之裔多一一定朝六世之孫蓮慶其子一巧  
心之玉眼之製も運慶法印と始とてとてとてとてとて  
天智天皇し御宇枕言主勳祖者又惠父子れ佛工初別春身  
地に住ち一但是は異邦投化の人の我國佛工し始蓋一  
康高法中り或云志くはは系あい中り者にあはれさある  
と乞言の部れとてい何そ中を我れ古代のち小教  
日施業療非田の回と院と建以多窮及重病し者け内く  
まのひ其勇壯くるり一とものニ業と扱けせと遂しむ凡け四  
院し内教日院のく信僧の舎りして始りて院いあく一忍後  
徹方し布聖り或い一口乞言せし者もあはれそねく準しそ  
彼ら院よりかゝる者の刺くとい乞言の被れと呼るり

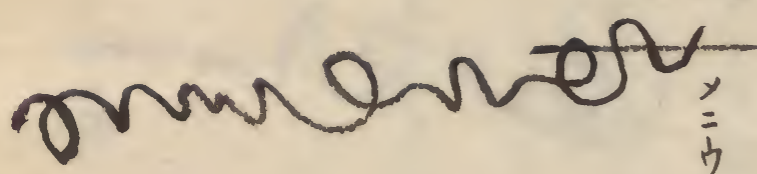
後天祥よりひわ之征程此ある者るれと一旦京師在河  
平より紀りて或い南に船着後より余書抄て又盲者  
の説よ者一私家盲人と懸りひて上か野封境の中よ  
田野と垂て向の園小官福ありて衆音の舎に治けしと  
是亦藤初院し然るも一昔天皇ちの四ヶ院攝河西川の  
内に官福と千部と費用に仰り一古祀に足えは信れは  
此佛心身也一多一多うやうは又別もやとてに是一い  
検校より稱一云氏初軍の旗之是より盲人とせに威あ  
りと云次や城に法旅宿少雨の寄秋の雨の意とく月あも  
くうん心もとらさ  
のよそありは 天種よとて一夜雨と勅号と下され一後わ松院  
初初あり  
とや盲人ののけらとよと光春天皇の王子に明と夫ひ

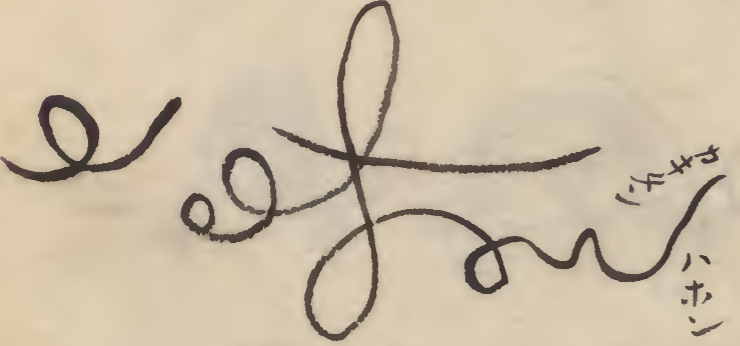




忽湯とわら年危とちものいともゆるき臺座座よ臥せらま  
 つ時く正兒と夫と又い脚時く死と若婦とあつて又  
 川はも蒸熱く一ちあつちやく地を揺るごとくく頭死  
 せしとやのち半歩も及ばぬとて怪別本方の奥ちあ  
 傍口磁器あつて雷をわいやりて器を散りあつて  
 山嶽温怒の毎年散るわい御よめけあて山半陰烟を  
 昏とて脚を傷て定たりとと事務のあつて扇のや  
 長通りゆく如斯くといと人おを悩とと移十年一内溜あ  
 り岩場辺定て進と新ちあづといとい  
 〇お秀人あつてあつて三月新日管中一よて徳国の流曲とと  
 といとあひ一その曲れらと回せられ一そのあひ一一曲のあは

〇この國のまよとてあまう一よとてあまあまの國ををわ  
 せあひ一あ

<sup>ハキハ</sup>  
  
<sup>ハニウテ</sup>

<sup>ハホシ</sup>  
  
<sup>ハホシ</sup>

凡漢字のよと書く  
 云々、概まのりよとて  
 音美ノ多ハ皆候よ半く阿業  
 院のハ徒則 文をて一般は  
 して中、号こここ北伏の漢所  
 字と書古字とのわとあや

東

西

南

北

諸社信神の神形とて神殿

ともはるる社

洞近の所

あり

如躰

あり

は像

なり



中せり

あり

同に

あり

あり

あり

あり

あり

あり

○法皇の御所 紅葉はらんは修学寺(御幸ありりる善  
明院文の四半)又後祓寿のがしき法皇しき

○秀吉喪柴屋 慶の付いし思ひのひらん一首乃奇(を御  
せしり

石橋しごきつめと消ぬち家身は難波のゆい慶のせれ中  
自身しそ電化者藏しよ常し流くゆめ色し一用あ  
らん附子遊がしそとの思ひ年屋て慶長三年八月十  
七日春院とて下てしりやあづけ金し奇やあち物来  
れと院との化やしよりしは年号月日律とも書  
ひて花押と半むかきしいぬいりよむ計し

○其後れりせはしりしき 聖日堯しきひもちり是と  
大園の印祥し世の奇しそしあの中家く修し院ありしそ  
丹羽の羽の字と世はしは京田のはあの子と世はしは京と稱  
し明光秀ありあの子と世はしは秀とらほしきとそ  
○或曰平康初八通鬼界の語し死流の後十卷の卒都婆  
と通し和奇し二そ半て鬼怨しそ海し信し其一巻法  
川嚴島しと探奇しと傳て終しむる

○其川ま浮かきああし我ありし教しは若しはそれ院風  
思ひをねいそしと思ふ縁しよあ古はねおるしあ  
法皇も速うそしりしきしあは年家あ修しにせり  
然るしつ後しは法皇法皇のあしとわしげんと

て此書は奇と率強盛く半世とてく活盛く之を  
多し一実く唐初に傳せしよあはれとめ伊市口近世軍  
法者ると傳りく所方活盛なり一されこそこの書の  
奇い実るものて新れも活く皆の半家也傳乃く  
よあはれ半世集書羈旅始

あらのあるるしありてあはぬむく傳りける所よ  
ゆら  
半唐初活盛

のく汁りうき方のやもはすはれはあはれく命のりり  
唐初活盛の書傳りく唐ありて新は書よはまの活風  
思ひやりはの奇いな一平家初傳は強弱のたは傳れり  
思ふよめら半唐あり後成の執とてけて撰せし

集りく言事ありて此らまてのせもつろと活計の奇  
あはれ云く伝る一活盛を世集るりともいつて執撰に  
仍傳のよあはれらつて改やは集文活之半一初唐也  
終一とや世傳の考もたうかの活よはせそ古の  
と活るもの二よあはれ

漢主羽と汁りて後武と思さんあはれ活書と傳れりあはれと  
附合よあ

○ 平家初活盛の書に初唐ありて一連奇の附は活盛  
紹巴

秋の花伝代もさうぬら香うね

カ際植通公活盛珍山さうらめて業平り奇は新田川  
にあはれぬものてくさるもの伝げもひさう活盛とて

新く行なやいりもさる事ありて作代もあぬと  
謂ふ意あり申比侍攷りてその比係むとて夢菴  
冬咳は作代もあぬはつと云

と云しその作風のまうて海はあつた

太神宮の御侍あつたかく御侍と云ふもぬ  
乞利の御家もあつたといふの係り

又秀吉若狭世の時法橋申巴郎の記の半に九條家と  
て系り係りうぬをいふ一七〇くは勿終とありし  
公少く右侍氏も治よいた係も半あつたと申比分死者  
中陰の七〇くく等しく羅のわいとて一七夜二七夜  
と半あつたと作つていふと云や又京惣御代をうけ

時主初は日回りは城をめぐりて修むとていふ  
とて又久を山の影と竜吟和尚半作一中空山と云ふを  
所流し系系の中に入山号ありといふとこの係り  
と云ふと云ふ中の中流大際山号とていふ

○ 慶樂よわ弁合の時若狭かゆ張嘯 雨中時考と

雨又晴れぬの候り乃時考とていふ

出舟日け弁の候り但一の合よそい他國のふ新海ぬ  
りこ又作れ、候りよ時考とていふ  
出舟常よ候りま中男のあつたに百はるか年し  
ふらむらうひのあつたもとくやんあつた恩許といふ人  
時く戒とていふ武家くはくも者い半しとていふ

今ノ留ルモ命ト失ル物ニカシケルニミタスルモノ  
ト云々制セムトク者怒アリト云々凡百仕ラズ内  
ノ者及滞ル者ありてたとひ他國より大なるありとも  
は内家にて別の名とや頼じしごとく忠を誨めや  
ありしと云々これハ勝りて不意の籠城の時も大  
そゆとく攻るる能はれ將のつ云謀をむ士率也と  
して義は死するる和漢古々留る事あり侍の  
○我尾別 國府宮の追儼他不の云々半一の指よん  
思入り古ハ法西の方処くよ行り又板屋をい徳山刀田山  
法華山大山湯水ち皆くよをりて鬼走りとするは  
殺て鬼と云々ゆい他別々いりるるの云々  
科と云々てお流と勢しむ

琉球人於駿別清見予故君墳塚文

維時宝永七年庚寅冬十二月廿三日琉球国中山王使美室  
壬子尚紀豊見城士子尚祐等遣使贊官嘉手刈尚  
於前川尚克從於清見寺奉予故具志以王子尚克法  
號求士院大洋尚公大居士之靈嗚呼先生傳聞故君  
中山王尚寧公之愛予而尚懿公予二之王子之為某人  
也孝介而好忠信就尚寧王扈從薩州之大守而駿  
州不幸遇病時之慶長十五之年庚戌八月廿四日辭也  
驛辛時人築于茲星野荏苒至今一百年吾國俗稱  
駿河皇子者之嗚呼痛哉天涯殞身不得回鄉子孫  
雖多隔絶遐方經歷百歲元來焚香但有清見関

月訪寂寥三保杳風間荒涼而已吾輩曆此爭堪感心  
激謹陳菲礼以表寸悵之微先生有靈鑑之尚享

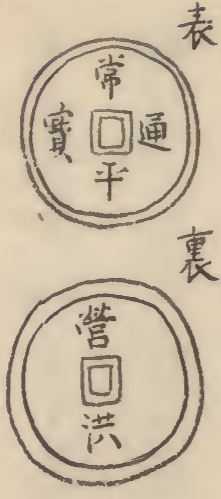
按神君年譜曰慶長十五年八月六日島津家久率琉球人王來駿府八  
日琉球王見公云々此時尚宏客致

○佛書仙人ト云つらい翻譯人仙の名と借て相語と譯セリ  
たゞ諸君は仙のくちまのくちま胎藏曼荼羅の中に婆蘇  
仙瞿曇仙阿底黑仙成就仙のくちまあり一又妙の中形と  
行とに依て仙と呼ぶ者一二にあり吾道士処堤仙人と異  
にして其類い近し

万葉集よ沙活漫誓う奇よ  
あゝぬひのほくくれば海は身よほけてし海は心よほけて  
何くくうよんち

○猷廟御上洛 寛永廿三 甲戌の御時七月六日我尾西萩魚驛と  
こさせりんし

折よあひて所とさけい若葉や林のくちまの流れり系  
古よりよき魚一奇もるさ知らるにゆく御せさせりん  
し少り里のるもいめてさくありてあやも傳ははらる  
屋さくも



朝鮮國より行りく大橋のちきさ徑一寸二分  
輪抄りして大清康熙清よ

○今川の赤糸とてをよ急病たり用ひてありありあり業  
あり是りく光澤院將軍の馬頭ひりりよ乞食の傍  
今多川糸とては馬とてとめりく急病たり







